連載
Series

Series

東日本大震災｜連続ルポ1｜動き出す被災地
Great East Japan Earthquake｜Serial Report 1｜Devastated Areas Have Just Started to Stir ── no.23

ルツェルン・フェスティバル　アーク・ノヴァ
LUCERNE FESTIVAL ARK NOVA

吉田涼子
Ryoko Yoshida

（株）イソザキ・アオキ　アンド　アソシエイツ／1984年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業。
同大学理工学術院創造理工学研究科建築学専攻修了。2009年磯崎新アトリエ入社。2011年イソザキ・アオキ　アンド　アソシエイツ移籍

LUCERNE FESTIVAL ARK NOVA（以下、ARK NOVA）とは、移動式コンサートホールを用いて東北地方を巡回する企画である。本稿はプロジェクト発起人のひとりである磯崎新のスタッフとしてかかわった立場から書くものである。建築的説明は他記事に譲るとして、プロジェクト発生から今年9月に行われた第一回イベントまで、これを取り巻いた人々の記事としたい。

きっかけは、3月11日の東日本大震災の翌日、スイスのルツェルン音楽祭の芸術監督ミヒャエル・ヘフリガー氏が、以前より親交の厚い日本の音楽事務所の梶本眞秀氏に、日本のために何かしたいと電話をしたことであった。ヘフリガー氏は幼少より来日経験が多く、日本に特別の親しみがあったという。当時は震災直後の衣食住支援が最も必要とされる状況であったが、二人が話すうち、精神的な復興が長期的に見て大切になるはずであり、それなら自分たちならではの方法として音楽を届ける支援ができないかとなり、コンサートをして東北を巡回するアイデアが生まれる。そこに、これも以前よりヘフリガー氏と交友のある磯崎新が加わり移動式コンサートホールの構想が練られた。移動することが最大のアイデンティティである。なるべく軽く、持ち運びできるよう、空気膜構造でドームをつくることを考えた。そのとき、ちょうどイギリス在住の彫刻家アニッシュ・カプーア氏が「Leviathan」という巨大バルーンの作品を発表しており、これを知った磯崎がカプーア氏にドームのデザインをお願いできないか声をかけることになった。こうして人の縁がつながっていくなかで、段々と話が大きく膨らんでいった。

ARK NOVAは新しい方舟という意味である。方舟に動物たちを乗せて洪水を生き延び、水が引いた後に虹が架かる「ノアの洪水物語」にちなんで希望を運ぶものとして名づけられた。加えて、磯崎は日本人として折口信夫の「まれびと」を持ち出した。まれびとが異邦人として芸能を携えて津々浦々を訪ねることで閉じていた村が活性化するという折口の概念を、ARK NOVAが東北を巡ることに重ねたが、これは芸術発生の原理とも言える。クラシック音楽が高価な建築であるコンサートホールで行われるばかりのものになった現状に対して、世界中どこでも音楽が届く仕組みをつくりたいとしきりに語るヘフリガー氏、また、普段音楽を聴かない人や子どもたちがカプーア氏のつくる形に魅かれて興味を持ち始めるなどの総合的な芸術体験を生む場をつくりたい、と語る梶本氏、震災復興を超えて文化事業づくりの新しいモデルにしたいという議論にもなった。

ルツェルン音楽祭は毎年夏に開かれる。2011年8月9日、指揮者クラウディオ・アバト氏とルツェルン祝祭管弦楽団による音楽祭初日の演奏とともにARK NOVA立ち上げが発表された。同時に、東北各地をこの計画を説明して回る活動がされた。当然ながら、こんな妙な音楽祭をやるなど想像できないとの反応が大半だったが、地域による復興状況の差が激しく、個々に違ったARK NOVAへの期待を聞く体験となる。最初期に賛同いただいた釜石では、役場の方々も大の音楽好きで、彼らと話すと釜石は音楽をはじめ伝統芸能も盛んで文化風土の強い町だという誇りが感じられた。釜石内で復興進度に格差が生じており、特に被害が大きく対応の遅れがちな地区でこそ音楽祭を行い、目に見える希望を見せたいとの言葉が印象的であった。開催すれば世界各地の報道陣が来るだろうから、まだがれきの残る風景と復興の様子を広く発信することもできる。宮古から気仙沼に至る国道45号沿いの町で開催してきたルート45港町コンサートを再びやりたいとの話から、ARK NOVAを使い沿岸の町の交流ができないかといった話も出た。町同士のコミュニケーションという視点では遠野も候補地であった。遠野の方と話すと、今度は、各沿岸都市からの交通要所となる立地を生かし、自らの被災にもかかわらず震災直後から支援の拠点になってきた誇りが感じられ、まだ音楽祭をやることができない町の方々を遠野に招待する形での開催はどうかとの案も出た。一方、水戸からは、茨城にも多く被災された方がいるにもかかわらず、東北3県への注目の影になっていたことに対し、水戸での開催によって被災地である現状を発信したいとの声もあった。東京・スイスでの議論から東北各地の声まで、

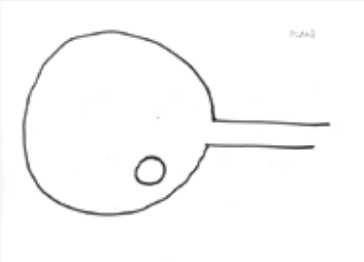

図1 | カプーア氏の最初のスケッチ。当初より内外を反転させるような穴のアイデアがあった

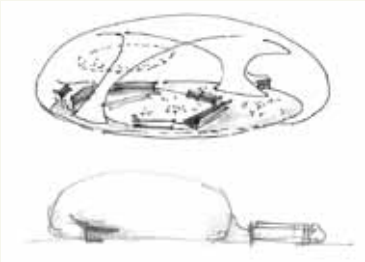

図2 | 磯崎のコンセプトスケッチ。内部の自由なレイアウトと移動することが表現されている

図3 | スタディ模型写真。運ばれてきたさまざまなアイテムが敷地にばら撒かれて会場をつくる

図4 | インフレート時の現場写真。空気を入れて2時間弱で形が立ち上がる

図5 | 内観写真。日光を透過して時間とともに表情が変化する。周囲の木陰も映る

図6 | 内観写真。仙台フィルハーモニー管弦楽団のコンサート

ARK NOVAがまったく異なる次元からの千差万別の願いの聞き役になっていくのが興味深かった。移動式コンサートホールという物体の想像がなければ本来重なることがなかっただろう人々の願いであり、そこに本計画の広がりがあることがわかった。

2年半の準備を経て、2013年9月27日～10月13日、宮城県松島町で第一回目の音楽祭が開催された。実務的には予算調整、イベント体制や演目づくり、ホールの構造・音響などの問題に多くの時間が費やされたが、そのなかでさらにさまざまな人がかかわることとなる。スポンサーとなったスイス・日本の企業、カプーア氏と共に動いたイギリスの設計チーム、日本の施工チーム、津波被害により立ち枯れになった松島町瑞巌寺の参道杉を使って客席ベンチをつくった宮城県森林組合と石巻工房、東北全域の子どもたちで編成されARK NOVAでの演奏に向けて練習してきた東北ユースオーケストラ、などなど。そして、開催地としてイベントを支えた松島町長以下町の方々である。こうしてARK NOVAに投影される個々人のイメージはよりいっそう多重的になった。演目も、ルツェルン祝祭管弦楽団メンバーの演奏だけでなく、仙台フィルハーモニー管弦楽団、定禅寺ストリートジャズフェスティバルや黒森神楽という東北ゆかりの公演、世界的音楽家と東北ユースオーケストラとのワークショップ、歌舞伎・日本舞踊・狂言の古典芸能、子どもたちを招待した演奏会など多岐に渡った。

当初より本計画はスイスやカプーア氏との強い結び付きによってローカルな町における出来事がダイレクトに世界への発信力を持つことになるだろうと考えてきた。逆に、通常なら東京をはじめ大都市中心に享受される芸術が地方の隅々に届くことも期待した。実際、開催してみて、2年経って下火になりがちな国際的な東北への興味を再び取り戻すような反響や文化的事業のあり方としての興味が、国内外含め寄せられた。海外からは、おそらく写真だけを見て経緯もよくわからずに自分たちもやりたいというも問い合わせも多く、よくも悪くも驚かされた。しかし逆に、第一回イベントが終わった今の課題のひとつは、どの点がこのように多様に人を惹きつける要素足りえたかを省みて意識的になる作業である。その点を見失わないようにイベントを続けることができれば、何年か後当初計画にかかわった人間の手を離れ、また、2011年を遠く感じる人が多くなったときにも、不思議な風船を見て何だろうと思わせることが震災の物語を知るきっかけになりうるからであり、ARK NOVAがそんな社会の備忘録になってくれたら、というのはこれを物としてつくった側の願いでもある。

図7 | 夜景写真。内部照明が透けて光る［図3-7 撮影：俣裕亮］